87
13
1961
87

薩摩手下芋兵衛
砂糖園子兵衛

五人斬西瓜割賣

全

へ13
1961
87

帝國圖書館藏

こくはく

引首

竹の皮ハ包るものハ。上りて天麩羅こゝあり。人の口ハ食れぬものハ。下りて去の國こゝあるなり。ちゝの雞卵のごゝゝていまゞ辟ゞ混沌ゝゝが らゝ。ピリ、ト唐ハ盤古氏ハて。日本ハ國常立ゝ神代ハいゞゝゝゞ。人の代ゝゝりてハ。夜食ハの三度。寺時もゝてハかゝハ屋ゝゝゞ。彼ゝゝゝべんべゝゝゝゝて。羽織ゝとゝゝものゝゝゝゝゝ踏ゝ濤も。三

度の飯ハかゝれど。周の粟飯とゝのへ。又貴の
吁意地も。蕨ぶるゝべ干ゑぬべ―腐そぬひて
食とる悪七兵衛菜清も。腮とつる釣いりさぞ。
浪人くゝどとる楊枝とゝん。まけとゝの諺ふおつ
どや。井りへに衣食住のうち。尤要むべき食氣ゑ
り。命ハ食ふあり。牡丹餅ハ仏へ物ふあり。口ふ孝行。ち
果報。出用もにふ入るゝあり。ちゝつ。むゝのひゝ石
の。苏ゑもいろの菜翠食神盤の身代りふ。給

小袖とお殺鼻ゑあれば。漬菜の香物ふ芋を
まげる新褸あり。お儀糸ゑのお酒ゑも。酔ふ淀とゑ
ば。和泉とゝる抑助も。風紋巻麦ふ舌とゑ
らと。鰹の雑焼茶の抑雑執。ゑとおゝ親父も。
去産の菓子ふ巾茶の底とゝゝ。日本一の桑雲ゑ
ふい。鬼ゑ宮ゝへもお供とゆを茶とゝゝも酒ゑゝ。而白かゝ。
月と賞ゝもゑゑゑゝ不興あり。妻のゝゝめの雑
煮隙ハ。万歳の腹ふゝち。神年の鏞ハ。宮奴の口

とくやと。桃の節句の草の餅。お釈迦さまの鼻くと隙。端午の粽。天王の祭。七夕の素麺。十三夜の衣ろぎ。重九の菓酒。夷講の宮盛あれば。祖師の日新の牡丹隙あり。新又世の蒸籠あれば。いもひの後取あり。蝶採の鞦韆。年のくれの賀隙まで。四季折節のいろ菓子。いづれも食氣ふかうぎるや。鞠子の病の菓。新汁に芭蕉の白と味ひ。今新山の米饅頭。遺供がわくかとわさんど。雪の日の

河豚羹に。命とうける隠者あれが。居燈の帆立貝に。松とまもと色男あり。曽子の孝子。楊貴妃の茘枝。革沢の傍。栗とねむ姫。みなゆゑ小深谷。松江の洗鯨。而高の鯉の羹に。ちよづど。蜀山の薑。味噌ハ。中之町の山葵酒。ふるど。上ミハ二の膳付の料理より。下モハ十二文の茶漬まで。食物店の娘ひ。日くくふさうんあて。時ふおこるゝ。百膳の安賣あれば。なんでも四文の二手

かゞあり。鱠奥の蒲焼ハ鰻鰌と歟さかゞちやの
胡麻汁ハ唐茄子とゑびごろふを大根とう
ちゝふふとる鯛ぶつも。行燈ゝ多ゝびやゝゝく形ろ
巨海小横ゝゝる大鯨も。割賣とうれば。掘の屋ホ
かゝろゝ仏牲の麻とおどろうゝて。牡丹の吸物し
妻魚麻とあ殺して紅葉の吸物ゝを玉屑とくらゝ
但人狼汗とも鳳凰ハつぎ志の砂糖煎人生一代狼
見にのゝられけろゝゝされば儒者も割正しかゝるゝゝひ孔者ハ本

来食ゝと茶と。神石者ハ高天が服のゝる
ゝゝといゝゝ。鳥類高ゝもゝれと脱がゝく。狐ハ油
嵐小令とおゝゝ。解ゝい湯粉小甲とゝらるゝ花
で天ゝに油揚とゝも。鯖屋かとゝて畠ろ
芋とれゝゝふ。人ゝとゝゝふ狼子ゝゝふ鯨砂糖小
あろまる蟻。乾糞小ゝる蝿までもいつまろにとゝ
ゝざる。茶小明堂も制肆の異名ゝゝ。水小仕性
のゝぶ。玉杓子の名と知るもゝゝて食氣のゝゝ

ゐり。元丈の外といへども又もろ〳〵の菜蔬稲米の米の豆子に神祇をまつり。因果地義ハろ〳〵けの指に利益をたゞしハを。十王が納をもくろがゝゐ爾慰の建立も墨のトれあり一分のキのドゑハ百味の飲食を具食どゐの煮ハ火鍋の飯粮とゆのーむ。極乗も地獄も又にゐつゐる伊尹ハ湯王の割烹的ゐゐり。易牙ハ桓公の庖廚を管る人の青雲も又食氣ホよろふてゐられたまてゐるひ。腹ゐ

ゐり。腹ゐ〳〵ゐんざり。腹ゐり腹ゐ〳〵ど。孫ゐ人後家も。ゐゐゐ氣糸後家も。一切ゐ屠せ咋判促して一餐をわ〳〵そゐ。細工ハ粒〳〵皆辛苦。一腦飯もそ〳〵ゐざらんや。ろ〳〵まざ〳〵んや嗚乎やれ〳〵

山東京傳戯誌

享和四年甲子孟春

醒世老人

孟軻が語に。色食い性也とゝ。色氣より食氣。
花より團子の世の中。燈籠見物の土手に瓜西瓜の山と。
日暮雁鳥の花盛に團子の賣さまゝ紙ゆく知るべし。
南蛮黍いなゝの鮫とあぐれば心太い水晶の折木と
つぶる。編笠焼に伊たゝつが昔とゝのべば金鍔焼に六方乃
男達と好りゝ女郎の誠も。雉卵焼の四角にたゝど。晦日の
月より黒砂糖の闇と賣来る汁粉餅風鈴蕎麥に初
秋の扨とづれとき。けば。蒟蒻のおでんに寒く夜のあつさゝいと扨ゞよ。
口ゐ土用の入相に。腹の時計のぐあひとうかゝ。腹ゝこゝ
に案じゝ取やゝ此位かりのさ則以為序

享和四年甲子孟春

山東京傳戯述

大福錦
白玉市膳

大関
大だんご

どぜう

四文

「ゑゝこれ
でるのつ〳〵
こと〳〵こと
にあつまる
きく〳〵ちん
しつのさゝら
水あつのこゝ
に拾ひと
ふりこと
ゝるくとりの
あゝ人ー

「おちやゞゝーゞ
ちんゝん
のあねざけ
ゝん
れのゝ
ゝゝ
ゝを
ゝのこゝ
つゝて
もゝ
のゝ
ゝ
ども
あゝ
ゝけ
ゝ
にざゝ
られ
ゝ
ゝ
ゝ

とろろ焼

「ここやしき人へちひとそそくも
もぐこのさこれころころいこぐんさぬ
たしへ氏勇ハ世でさここあろふろの
ひとふつこれてこころこれあこそも
あまへ世ハかこいこやせれかいもづいえん
鰊芋ひくいもこころの
ぐちやくんナア
鰊
八大カ

「五大カしかぐさ
と八大カこころく
こころへ
掘芋足
戴大星寺
煮鍋疾
歎吉野桜
京傳店

げいもべいさん
ようこそひさしぶり
ひさしぶりこんなこと
あるとは

小方がうでき〻れて
〻このあ〜〻あるりげいもべいが
ひるのもとをいつきぶ〜〻ぐろてる

げいもべいさんの
小まんげいもべいとこんな
ようなあばら
ふとろつき
〻〻のま
こ〻ぬうち
あけてつく
〻〻せ〜〻げ
るべいちべん
もつきど
でだろうそう
ゆそうそうきう
おそう〜けれいふ
方かまあいさの
うゆこをわる
〻〻〻とまべん
くびくちふく〜
竹のえいつんて
さるとにあ〜ら
ぶんこえとうちもしる
こ〻をさんれんふあひるが
うふんぶりへうふまぶとうふ
ふうとうとうえひあぶ〜あり〜と
くらうえれ

げいもべいが小方がくびとぶ〜てこうのえ
にのせうり〜〻れば小方が
くびでふあてあぶれの
やうえんあれだきもをべ
をこれいふるべいうの
ひせうふ〻ゆてまらべ
こうのあうまこのあ〻
とやうえんとつてこ〜
ぶ〜んをんあうりえむかのとふ
ふうこいてる小方がうでを
これがこのあ〜るゆえ
とあそこれとさうあれ一ないい
してやえんこあうなをせる
こうこうのこけをうのやうえんに
うあ〜かんどさんこうり〜〻れが
やうえんのくちにむをひつけこうのあ
あり〜こうてこれが小方がかをこをゆて
これがこをこうれあいそつ〜こうのひ〜うえん
かんえんふあ〜ふにおえんのいのちとこをけこう
えうこうりこあふちあかちうはさのまれ〜いうぶ
えうがうとこうこ〜くうれえんだのこうこうふんこえ
がうこいちこうふあるこうとこうあうふあこうあ
けうのべこをまやこうこ〻〻こうこうい〜もべ

〻〻〻ふもう〻を
くうべ〜〻〻
いもこうてやこ
い〻をべうこと
はあくあんこ
ちこれこう
げ〻ん〻ふうこ
のやこ〻こと
べいあれに
ああちこう
しのこあを
こうこ〻
〻〻ふこ
べいう
こうべあ
あ小まんい
ちんあ
くこ〻
ちこう

本胡麻揚

「ひやどうんのごんたあるふれ

「げらもびいよおそれ
げーがさんーのすくらんさんごのれうひろけ
とうあそれ

京傳戯作